

Title	"Three Modern Satirists : Waugh, Orwell, and Huxley" by S. J. Greenblatt (1965) について
Sub Title	Three modern satirists : Waugh, Orwell, and Huxley, by S.J. Greenblatt
Author	上村, 達雄(Kamimura, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1966
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.21, (1966. 4) ,p.62- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00210001-0062">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00210001-0062</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

“Three Modern Satirists:  
Waugh, Orwell, and Huxley”  
by S. J. Greenblatt (1965)

上 村 達 雄

について

サタイア（風刺文学）とは元來技巧的なものだ。作者があらかじめ仕組んだ知的なプランに従って各人物は行動しなければならぬ。各人物は作者の意図を越えた性格をもってはならず、ナマの人間であるよりタイプであることを要する。登場人物に思考や行動の自由を与えないだけに、作者にかゝる知的な負担は大きい。そのように大きな知的緊張に堪えてまで、嘲笑し、破壊しなければならぬ対象をもっているということは、当然作者の側にそれにもさる価値の意識があるということである。その価値の内容が政治的に云って、進歩であろうと、また保守であろうと、高度に知的なものであると、感情になすんだものであると、積極的な定立であろうと受け身の反定立であろうと文学の間うところではない。大事なことは作家が自己の価値と他者の価値との闘いを、自己の価値の勝利に導くように綿密な作戦を立てて、それを遂行することにある。この場合、一つの価値の勝利ということは、必ずしも一つの作品におけるその価値の文字通りの勝利である必要はない。むしろ芸術的な効果から云えば、その自己の価値の敗北を示して、反語的に問いかける方が有効である場合が多いと云わなければならない。勝者よりも受難者に同情が注がれることが計算に入るのは当然である。従つてあるサテイリストのあるサタイアが悲観的な暗い結末を示しているからと云って、直ちにその作者の意図をそういうものとして付度

することは危険である。芸術的な効果への配慮のない作品というものはないからである。従つてそのサテイリストの多くの作品を検討する必要があるし、またサテイリストの抱懐する価値自体が年月の経過とともに、発展したり、移動したり、最悪の場合には逆転したりすることもあり得ることを考えなければならない。——たとえば、Huxley の “Brave New World” (1932) を読んだ限りでは、一時的な安楽死を人間に与えるソーマという薬を作者は「野蠻人」と声を合せて非難し、その廃棄に同調しているとしか考えられない。しかるに晩年の “Island” (1962) では、宗教的な恍惚を促す似たような薬モクシヤが、力をこめて弁護されている。この一見明白な変節は、じつはこの両作の間を埋める、またそれに先立つ幾つかの論策や小品に示された作者のこの種類の薬に対する異常な興味によつて、かろうじて説明がつくものであるが、現象的にはあくまで逆転である。

従つて個々の作品からサテイリストのナマの姿をとらえる操作はいよゝゝ困難な、陥せいに充ちた仕事となつて来る。サタイアはあくまで知的な構築物であつて、そこに盛られた思想が必ずしも作者を全幅的に表わすものでないことはもちろん、場合によっては、作者の流動し変転する価値観がとうにその思想を見捨てているのに、作家としての対世間的な身振りの必要から従来通りの構築物を、もぬけのからのようにそこに残しているかも知れないのである。

さて、こうした点を念頭に置きながら、本書の輪廓を語る順序であるが、著者 Greenblatt は Yale 大学の四年在学中にこの論文を書いたと云う。同大学の三人の教授から成る委員会がこれを刊行に値する優秀な業績と見なして、Yale College Series の第三冊として世に出したものである。

著者はまず第一章で E. Waugh をその初期の四つの小説——Decline and Fall (1928), Vile Bodies (1930), Black Mischief (1932), A Handful of Dust (1934) によつて分析する。最初の “Decline ——” では、世馴れない善良な神学生 Paul Pennyfeather が、友人たちのいたずらの犠牲となつてオックスフォードを退校させられ、あるパブリックスクールに奉職するが、そこに渦巻く退廃と悪徳の中にまき込まれて行く。生徒の母親であり、南米に人肉市場を経営する女 Margot と結ばれるが、その商売に連座したかどで捕えられ獄に下る。しかし結局は女の新しい愛人である貴族のはからいで獄を出て、ふたたびもとのオックスフォードに故 Paul の従弟とい

つわって復帰する。こゝに描かれているのは学校社会、貴族社会の退廃と残酷であり、また古きよき建造物をアルミやプラスチックを用いて次々とアパートや、娯楽施設に改造してゆくデモクラシーの破壊行為であって、その間を縫って転々とする主人公 Paul は当然ながら各場面をつなぐ狂言回しの役を演ずるだけで、行為の主体性をもつてはいない。それゆえ彼は、さまざまな奇怪な荒廃を経験したための傷は心に受けたけれども、本質的にはもとのまゝの受け身な善良な人間としてオックスフォードに帰つて行くのだと著書は指摘する。(p. 12) こうした回帰的結末は単にこゝだけのものではなく、“Black Mischief”におけるアフリカの仮空の國 Azania の黒人たちもまた、文明の恩恵を与えに來たと自負する白人たちのいろいろな施策が失敗に帰したあと、結局はもとのまゝの、食人さえも辞さない野蛮に立ちかえるのであり、こゝにも出発点から終点への無益な、喜劇的円環があると云う。(p. 22) Waugh の作品から拾い出されたこの巡環という形式的特色は、第四章の結論において、さらにサタイア一般の基本的な形式のおよび主題的特徴として強調されることになるのである。

「同様に、Animal Farm の発端において、動物たちは豚のような主人たちに圧迫されているが、また結末において彼らの革命が『成功』したあとで、こんどは豚どもの圧制に苦しめられるのである。最後に、Come Yellow の最初の部分で、人生に幻滅した若い Denis Stone はロンドンからクロム荘園に到着する。そして結末のところで同じように幻滅したまゝロンドンへと発つて行くのである。」(p. 114)

「この悪魔的ら旋、ないし円環はダンテの地獄篇にもっとも偉大な現れを見るが、これは事実上あらゆるサタイアの核心をなすものと思われる。なぜならどの作品の細部もこの形式に従って配列されているからである。」(p. 114) もちろんこうした形式上の円環はテーマの円環と不可分の関係に立つ。

「なぜなら、サタイアの扱うものは生存の無限な、無意味な巡環であり、空虚と絶望であり、行動不能であり、運命の不吉な車輪だからである。」(p. 115) こう断じて、著書は最後の二ページに Waugh と Orwell と Huxley の作品の細部から、巡環を示す描写を

引用して次のように結んでいる。

「三者の経歴も態度も違っているが、*Waugh* と *Orwell* と *Huxley* とは、みな人間を疎外、空虚、狂気、悪の恐ろしい円環に封じ込められた存在と見なしている。この悪魔的円環のイメージを創造すること、すなわちサタイアを書くことによって、胸中の堪えがたい怒りと落胆の圧迫を軽減しているのである。……さらに、われわれが捕われているこの悪魔的円環に対するわれわれの認識を高めることによって、サティリストはわれわれにその円環を断ち切る力を、真の方向、意味、人間性をもった生の回復をはかる力を、与えてくれるのかも知れない。」(p. 117)

ところで、この「不吉ならぬ旋」「不吉な円環」の概念は著書の創見ではなく、概念としては、*Northrop Frye* の “*Anatomy of Criticism*” (1957) に負っていることを著者はことわっているが (p. 114)、それをサタイアの核心に位置づけたことは、たしかに一つの前進であって、この一篇が大学生の論文であるにもかかわらず、刊行の栄を荷ったのも、こうした位置づけの確かさによるところが大きいと思われる。本書の手柄の第二は、第三章で *Huxley* の “*Crome Yellow*” を分析するところ、あの名高い挿話——*the History of Crome*——すなわち小人の領主夫妻の話と、その息子の巨大な *Ferdinando* の話、さらに *Ferdinando* の二人の食の細い娘たちの話に至る年代記を、従来幾人かの批評家が、地の物語と何の脈絡もない、しかし意味深長な話として扱っていたのに反して、これをみるとに地の物語と関連づけて説きあかしたことである。(p. 83-86)

著書によれば、物語の背景をなす十七世紀に建築されたクロームの城館では、廁を不浄なるがゆえにかえて天に近く最上階に設けてあるというのは、建築家であった領主が人間性の自然に対して不遜な反逆を企てたことを意味し、十八世紀にその子孫の中に小人が生れ、領主となって小人の配偶者を得て、蛮勇や力や巨大を憎み、小さな人工的な栄光に酔っていたというのは、十八世紀に対する *Huxley* のイメージを示したものであり、十九世紀にその孫娘が、ロマンチックな精神性に陶醉し、肉体的なものは食欲に至るまで汚らわしいとして斥けたふりをしながら、密室にかくれてひそかに大食していたことは、十九世紀の虚偽と偽善を示したものであり、それに引続いて、地の物語のこの城館に集う二十世紀の人々の高踏的な超主知主義 (*Hyperintellectualism*) を展開して見せることによ

て、人間がいかに古くから、今日にいたるまで、自分の中にある「自然」を冷遇しながら、いびつな生を営んで来たかを風刺しているのである、と。この緻密な分析と総合に対して、おそらく今後この挿話に関して行なわれるどんな解釈も一応の敬意を払わなければならないだろう。

しわし私の不満は、著書がサタイアのこのような形式的また主題的分析を手がかりに、直ちに作家そのものを論じ去ろうとするその性急さにある。データは明らかに不足しているのに、主張は断定的である。著書は云う——、Huxley は人間の自然からの離反を風刺するが、じつは Huxley 自身「後年の永遠の哲学と云つたような居心地のいい、形而上学的な隠れ場の発見」(p. 87) などからもわかるように、自然から逃避すタイプの人間だった、と。しかし「永遠の哲学」のあとに「島」が来て、芸術的には失敗だったとしても、官能(自然)と精神の壮大な融合調和を意図した事実をどう見るか。この遺作を足場にして、こゝから逆に全作品に照明を与えて見るならば、Huxley を単に反自然的な主知主義的な作家と断定するわけにはいかなくなるであろう。

また Waugh については、著書は Waugh をひたすら古きよき England に郷愁を寄せて、「文化」による田園の侵害と荒廃を慨いている悲観主義者として扱っているが、彼は“Vile Bodies”(1930)の翌年にカソリックに入信している。そこで、たとえば後期の“Men at Arms”(1952)では、主人公 Guy は神に奉仕するのと同じ気持で祖国に奉仕しようと決意して、第二次大戦に従軍するのである。つまりそのような肯定的積極的な考え方に転ずる契機が入信であったとするなら、サティリストとしての評価にもこの視点を省略するわけにはいかないはずである。

また Orwell の政治思想としてひろく知られている一種の社会主義が、決して現実の政治に迫力をもって噛み合うようなものではなく、多分にセンチメンタルな、ユートピア的なものであった事(p. 66)は、私も全く同感であって、彼が心の底では現実の社会主義が約束する物質的繁栄と、合理的な生活様式を嫌悪し、むしろ十九世紀的な田園の炉辺の幸福を願っていたことを私は別の機会に指摘したことがある。しかしだからと云って、晩年の作「一九八四年」で、著書が云うように、Orwell は全く悲観的で人間社会の破滅へ向っての「奇怪な前進を絶対に何ものも阻止出来ない」(p. 66)と考えていたかどうか。つまり社会主義的な望みを全面的に放棄し

て、絶望に沈んでいたかどうか。主人公 Winston が恋人 Julia とともに国家警察に捕えられる直前、窓の下の中庭に洗濯物を干しながら無心に歌い続ける庶民 (the proles) の女を見て、

「庶民は不滅だ。中庭のあの屈強な姿を見たら、そのことは疑えないのだ。結局は彼らの目覚めが訪れるだろう。そしてそれが実現するまでは、たとえ千年先のことであろうと、彼らはあらゆる逆境に耐えて生き残り、小鳥のように活力を……党のもっていない、また滅すことも出来ない活力を個体から個体へと伝えて行くのだ。」(Signet Book p. 188) と心に思う場面は、サタイアとしてのプロットに何の関係もなしに書き込まれているだけに、死を目前にした Orwell の、絶望とはちがった心境を伝えてはいまいか。これらを“Animal Farm”の次元に移して云えば、なるほど結末は豚に支配される動物たちのみじめな図で終っているかも知れないが、何世代かのちには動物たちの目覚めのとかが来ることを、作者はどこかで意識しながら、芸術的効果の忠実なしもべとなって、あのように反語的に話を結んだのだと考えるのは無理であろうか。

つまり云いたいことは、サタイアはあくまで知的構築物であって、それが円環的特色を示していることは、作者の精神の外部にあるサタイアの文法であって、そのまゝ作者の心情の悲劇的円環を裏書きするものではないということだ。

(一九六五・十一・一)